



家庭に入ったB夫人 ——『富と貧困』と晩年のマーセット作品——

吉 野 成 美

要旨 本稿は、ジェイン・マーセットが著した経済学に関する3冊の教本のうち最後に発表した『富と貧困』(1851)について、その内容を、マーセットが手がけた様々なテーマの教本類との関連性から考察している。一連のマーセット作品群は登場人物の名前やその設定から、個々に独立していながらもそれぞれ緩やかなつながりが認められる。そして、一見、種類の異なる作品である印象をもたれるはずの『富と貧困』も、実はそのつながりの延長線上にあることを、作品を精査していく過程で明らかにしていく。

キーワード ジェイン・マーセット、『富と貧困』, 児童教本
原稿受理日 2010年1月14日

Abstract This paper examines *Rich and Poor* (1851), Jane Marcet's third and last educational work on economics, in relation to her other books in different genres. Although each of her books stands as an individual work, careful examinations will reveal some relations found among the scenes and characters in those works, through which a small fictional community is formed. This paper will show that *Rich and Poor* too, can be read as part of this community.

Key words Jane Marcet, *Rich and Poor*, textbooks for children

本研究は科研費(「19世紀英国におけるジェイン・マーセットの経済学大衆化への貢献とその意義」, 研究代表者 高木成美, 課題番号20730141)の助成を受けたものである。

ジェイン・マーセットは、生前、経済学に関する教本を三冊発表した。そしてその中で最初に出版され、もっとも有名になった『経済学対話』（1816）は若い女性を想定読者として、次に出版された『経済学に対するジョン・ホプキンスの見解』は労働者階級に経済学を浸透させるために⁽¹⁾、そして最後の作品『富と貧困』は6歳から10歳の子供を対象に、それぞれ書かれたとされている。

このように、同じ経済学を扱いながらも著書がターゲットとする読者層が三者三様、異なっている状況において、三冊目の『富と貧困』に関しては、先の二作品ほど、研究者の間で言及されることはなく、特に、その内容に関して精査されてこなかった。実際にこの三作品を読み比べてみると、『経済学対話』と『ジョン・ホプキンス』に関しては教本としてそれなりの意義が見出せる作品に仕上がっているといえるが、最後の『富と貧困』は果たして教本としての価値がある作品といえるのかどうか、疑問を感じさせる一冊となっている。想定読者を小学生にしていることからそうならざるをえなかったのか、その内容は、平易な文章や内容を心がけるあまり、時として稚拙であり、公平さを欠いたものとなっている。また、表題が体现しているように、経済学という学問を純粋に広めるというよりも、当時のイギリス社会の階級制度と資本主義経済による富の格差を、富める者の視点から貧者に対して説明し、正当性を示すことに固執した読み物であるといって差し支えないほど、貧富の二項対立を扱うことに終始してしまっているのである。マーセット研究者として知られるポーキングホーンでさえも、「本作品においてマーセットは19世紀半ばにおける経済問題についての世論についていっていなかったようだ」と評し、内容の質の低下を認めている⁽²⁾。

このように、マーセットの三点しかない経済学に関する教本のなかでもっとも注目度の少ない、そして評価の低い『富と貧困』ではあるが、この作品を発表した最晩年のマーセットの作風や、当時の教育的需要を考慮に入れたならば、この作品の有り体はある意味、必然の結果であったのではないだろうかとは私は考えている。周知の通り、マーセットは誰もが認める経済学者というわけではなく、むしろその大衆化の貢献者であり、その著書も経済学関連では生涯を通して3作しかないため、経済学史の分野で言及される際にはこれら3作品のみが互いに比較されるにとどまってきた。しかし、後に詳細を述べるが、マーセット自身の数十年にわたる執筆活動期において、『経済学対話』と『ジョン・ホプキン

(1) 以下、『ジョン・ホプキンス』と記す。

(2) Dimand, Robert W., Mary Ann Dimand, and Evelyn L. Forget. *A Biographical Dictionary of Women Economists*, p. 285.

ズ』は前期の作品であるのに対し、『富と貧困』は、彼女が10歳未満の小さな子供たち向けの教本を書くようになった後期の作品に属している。このため、内容的には同ジャンルである『経済学対話』、『ジョン・ホブキズ』よりむしろ、後期の別の作品群と比較・検討することで初めて、この作品の背景や、教育的配慮について新しい視点から考察できるものと考えられる。本論では、これまでほとんど注目されていなかった『富と貧困』に関して、マーセット作品群全体におけるその位置づけ、さらに晩年のマーセットが著した経済学以外のジャンルの教本類との関連性、そして作品テキストの具体的検証を試みる。

I. 『富と貧困』の設定とその背景

『富と貧困』の舞台は「田舎の村にある小学校」で、教えているのは学校長であるB氏（先生）である。B氏は、「年齢が比較的高くて知識も充分にある少年たちを集めて、彼らに経済学について教授しようかと提案」し（少女は一人も含まれない）、この設定が教本の始まりとなっている^③。

この冒頭部分で示される舞台設定の段階で、我々は著者マーセットの執筆にあたってのスタンスに明らかな変化を見ることができる。すなわち、女性のための経済学教本として有名になった『経済学対話』出版から約30年を経て、マーセットはあえて自ら作り出した虚構上の公的教育現場から女性の姿を抹消してしまっているのである。もちろん、『富と貧困』は男性のみならず女性読者に読まれて不適切である箇所は見当たらないため、登場人物が男性のみであることが直接、想定読者に女性を含んでいないということにはつながらない。ただしここで問題にしたいのは、実際の読者への直接的影響というよりは、著者であるマーセット自身の意識のありようである。マーセットはとりわけ、自身が予め設定した想定読者のジェンダーを意識した上で作品を手がける傾向がこれまで強かった。「女性のために」と銘打って書かれた対話集シリーズはそのようなわけでB夫人とエミリー、キャロライン姉妹が活躍し、想定読者としての女性に馴染みややすいような工夫が随所に施されていたことを思い返せば、この『富と貧困』における登場人物のジェンダー設定は大いに考えさせられるべき点であるといえる。つまり、マーセットがそもそも有名になり、その功績として称えられるきっかけとなった女性向け教本の出版を通して女子教育へ貢献したその出発地点から数十年後、彼女は自身の功績をまるで否定するかのようになり、今度は

③ Marcet, Jane Haldimand. *Rich and Poor*, p. 1. 以降、この作品からの引用は直後のカッコ内にてページ数を記す。

女子を完全排除した設定の教本でその執筆活動を終えようとしていたのである。

『富と貧困』で教鞭をとる先生の名前が「B」氏である点も、ここで注目しておきたい。これまでのシリーズからの連想で、このB氏とは、キャロラインの個人教授として経済学を教授したあのB夫人の男版—もっとふみこんでいうならば「夫」であると類推することはまったくの見当違いではないだろう。B氏の教育スタイルは、「簡単に馴染みやすく、講義というよりは会話形式」であり、生徒には「発言することを奨励」⁽⁴⁾ していて、B夫人のそれと酷似している(1)。そしてこのB氏の出現は、これまでのマーセットの教本ですっかり馴染みとなっていたB夫人をよく知る読者層にとって、突然の台頭⁽⁴⁾ であり、大きな変化であるといえる。なぜこの教本に限って、いつものB夫人ではなく、それでいてその名もB夫人を十二分に連想させうる「B」氏なのだろうか。果たして、この名前にはそれなりの必然性があるのだろうか。

その問いに対する答えの可能性を探るにあたって有益なのが、マーセットが手がけたその他の教本類である。マーセットは、B夫人とエミリー・キャロライン姉妹が登場する対話教本シリーズおよび『ジョン・ホプキンス』を著した後、キャロラインよりもさらに低年齢の「子供たち」に読者層をしぼった教本執筆に情熱を注ぐようになっていった。この転向の直接的きっかけに関して、ポーキングホーンは興味深い指摘をしている。彼女によれば、1833年に制定されることになる工場法の法案に関して、マーセットは労働に従事する子供たちの環境改善を支持する立場から賛成の意思を表明していた。しかしその見解は、同時期に同じ経済学のテーマで本を出版したハリエット・マルティノーの批判の対象となったのである。マルティノーは、子供の労働は家庭内の問題であり、国が介入すべきではないと考えており、「彼女 [マーセット] も [自分と] 同じように思うべきである」とその自伝の中で明言している。マルティノーの思いに反し、最終的に工場法は成立した。この結果自体はマーセットにとっては望みどおりの運びとなったわけであるが、マーセットはもはや自身の公的発言が政治に関係することを潔く思わなかった。事実、このことがあって後、彼女は「もう少し穏やかな」テーマを扱うようになり、彼女が「そのメッセージを発する対象はもはや一般大衆ではなく、子供たちのみに」しぼられていったのであった⁽⁵⁾。

実際、『ジョン・ホプキンス』以降に始まった、エミリーやキャロラインよりもさらに

(4) B氏は1826年に出版された『キリスト教の対話教本』において一度登場しているが、このことに関しては後に詳しく述べる。

(5) Polkinghorn, Bette. P. 109.

年少の小学生の子供たちを対象にしたマーセットの新たな教本シリーズ（以下、本論では「新対話教本シリーズ」と明記することにする）では、そのすべてではないにしても比較的多くの教本において再びB夫人が登場し、博学な知識を平易な口調の解説で子供たちにかみくだいて伝授している。しかし、これらの新しい教本において、B夫人はもはや良家の子女に外部から招き入れられた「先生」としての役割は果たしてはいない。かつてキャロラインやエミリーに個人教授を施した際の経験を生かしつつも、今度は自分自身が「賢母」として、実の子供たちを相手に、完全に閉じられた家庭内の空間で、ときには庭で砂遊びをする子供たちの相手をしてしながら（『子供のための対話教本—陸と水』）、また、家族旅行の合間に（『対話教本—英国の歴史 1 & 2』）、あらゆる学問領域を、日常生活を営む中でごく自然な形で網羅していくのである。もっとも、B夫人はもともとが公共の教育現場で制度化された「先生」として教鞭をとっている設定で創造されたキャラクターではなかった。だが、キャロラインやエミリーに教示していた頃の彼女は、たとえ教室空間が家庭内の居間であったとしても、女生徒たちを前に秩序あるカリキュラムに沿って講義をすすめる、それなりに権威のある「教師」のような役割を授けられていたことは間違いなかった。ところが新たなシリーズにおけるB夫人は、博学ではあるが、もはや他家の子女に学問を教え込む教師の職を退き、エドワード、ウィリー、ソフィー、そしてキャロラインといった推定年齢10歳未満の子供たちの母親として、ありふれた日常生活の中にみとめられる子供たちの疑問を拾い出し、そこに学問的要素をまじえて知識を伝授する、ヴィクトリア朝の模範的母親としての役割を完璧なまでに果たしている。そして実際、ソフィーはマーセット自身の娘の名前であり、この「知」という意味を授けられた教本内のソフィーは、シリーズの中でも頻繁に登場し、まさに母から娘へ英知を伝授される模範的娘としてのアイコン的役割を担うことになるのである⁽⁶⁾。

マーセットの対話教本シリーズにおける登場人物の設定をまとめていくと、興味深い事実が少なくとも二点、浮かび上がってくる。一つ目は性差の問題で、表1⁽⁷⁾に明らかであるように、対話教本における子供のうち、女子児童が登場するものはすべて、母親との対話のみであるのに対し、男子児童が登場するものは、その対話相手として、父、母、そして外部の指導者（先生）の三通りにわかれているのである。

(6) この点に関しては、後に詳細を説明する図2を参照。

(7) この表を作成するにあたって参照した一次資料は本論末尾に参考資料として挙げている。ただし『文法のゲーム』に限っては、ポーキングホーンの著したマーセットの伝記 *Jane Marcet: An Uncommon Woman* に記載されていた説明を参照した(126)。

表1 マーセットの主な対話教本と登場人物の内訳

書名	出版年	登場人物と作中で言及される主な家族（子供の順列は推定年齢順）
『化学対話』	(1805)	B夫人, エミリー, キャロライン
『経済学対話』	(1816)	B夫人, キャロライン
『物理学対話』	(1819)	B夫人, エミリー, キャロライン
『キリスト教対話』	(1826)	B氏, ビアトリス, エドワード
『植物学対話』	(1829)	B夫人, エミリー, キャロライン
『ジョン・ホブキンズの経済学に対する見解』	(1833)	ジョン・ホブキンズ, ホブキンズ夫人, トム, (他8人の子供たち)
『メアリーの文法』	(1835)	母, メアリー, ソフィー
『ウィリーの子供向け物語』	(1835)	父, 母, ウィリー, ソフィー
『ウィリーの休日』	(1836)	母, ウィリー
『子供のための対話教本—陸と水』	(1838)	B夫人, エドワード, ウィリー, ソフィー, キャロライン
『文法のゲーム』*	(1842)	B夫人, エドワード, ウィリー, キャロライン
『対話教本—英国の歴史 1 & 2』	(1842, 1844)	B夫人, ソフィー, エドワード, ウィリー, キャロライン
『動物, 植物, 鉱物に関する教本』	(1843)	先生, 生徒A, 生徒B, 生徒C, 生徒D (性別・名前不詳)
『言語についての対話教本』	(1844)	B夫人, ウィリー, ソフィー, メアリー, エドワード, チャーリー
『ウィリーの文法』	(1845)	トンプソン氏, ウィリー, ソフィー
『ウィリーの列車の旅』**	(1847)	父, 母, ウィリー
『富と貧困』	(1851)	B氏, トム, ジョン, エドワード, ジョージ, ウィリアム, ハリー, ジェム

* ゴシック体表記の人物は作中の主要登場人物であることを示す。

作者による登場人物の性差の扱いが決して偶然ではないことは、マーセットの児童向け教本の中でも特に名前の知られている『メアリーの文法』と『ウィリーの文法』を比較することで明確になるだろう。この二つの作品は、別々の教本として存在しているが、『ウィリーの文法』はその10年前に出版されていた『メアリーの文法』の登場人物の名前と会話の内容を所々で変えた改訂版であり、その内容はほぼ同じものである。しかしここでも、教本としての指導内容や会話の内容までほとんど同じであるにもかかわらず、学ぶ主人公がメアリーの場合は家庭内における実母との対話であるのに対し、ウィリーの場合は、公的空間である学校の教室において、トンプソン氏という「先生」から、個人教授を受ける体裁をとっている⁽⁸⁾。このことから明らかなのは、マーセットはその教本執筆に際して、

(8) 『ウィリーの文法』は『メアリーの文法』で見られた母と娘の役柄をそっくり男性の大人と子供に引き継がれたため、場所は学校でありながら、ウィリーはトンプソン氏から個人レッスンを受けているという、ある意味不自然な設定になっている。そして本文のある箇所で、ウィリーの

登場人物の性別設定を意図的に使い分けており、『ジョン・ホプキンス』以降の作品においては、知識を与える場合でも与えられる場合でも、女性が、公的な場所はもちろんのこと、自身の家以外で登場することはなくなっているという事実である。学習者の立場だけを見ても、マーセットの教本において知識を外部から取り入れられるのは男性だけで、女性は母親以外からの知のアクセスを阻まれている。『富と貧困』において女性登場人物が完全に排除されているという事実の背景には、1833年の『ジョン・ホプキンス』以降に見られるマーセット作品に保守化の傾向があったということが以上のことから明らかになったといえるだろう。

表に関してもう一点、登場人物の名前から推測できることがある。それは、マーセットのおよそ半世紀にわたる対話教本執筆の過程において、登場人物たちは、B夫人を中心にその生徒や子供を通して徐々に家族関係を広げていき、単なる教本の対話従事者として恣意的に名前を与えられたその場限りの話者の域を超え、あたかも連続性のある家族小説の主人公たちとして馴染みのキャラクターとなっていることである。以下に具体的に説明を試みよう。『メアリーの文法』では母親（「お母さん」とだけ呼ばれていて、名前はない）とメアリーが登場した。二人の会話から、メアリーには年下の妹ソフィーが存在すること、ソフィーの面倒は労働者階級の乳母がみており、さらに母親はメアリーに対してこの乳母の話し方を好ましくない例として取り上げ、真似してはならないと注意していることから、メアリーの家が中上流階級の家であることが推測される。次に『ウィリーの子供向け物語』では、その後シリーズとなるウィリー教本の主人公であるウィリーが初登場するが、彼にもまた、ソフィーという名前の妹がいるという設定になっている。メアリー教本にもウィリー教本にもその対話相手としての母親（ウィリー教本の場合には父親も該当する）に名前はついてはいない。しかし、ほどなくして、エミリーとキャロラインを師事した後、久しく姿を現さなかったB夫人が今度は母として実の子供に家庭内教育を施す『子供のための対話教本一陸と水』が出版される。そして、この本において、登場する4名の子供のうち二人がウィリアムとソフィーと名付けられており、この時点で、ウィリー

＼質問に対する答えのセリフの直後に「……と父親は言った」という記述が見られるのだが、これは文脈から考えてマーセットの単純な記述ミスである可能性が高い。この「ミス」は、トンプソン氏がウィリーにとってより公式的な先生というよりはむしろ親しみやすい「父親」として位置づけられたキャラクターであることを裏付けてもいる。そうなるとなおさら、ウィリーは果たして文法を学校で学ぶ必要があったのか―逆を言えば父親（もしくは母親）が家で補講をしているという設定では何か不都合であったのか、という疑問が生じる。マーセットは『ウィリーの文法』の序文において、就学男子児童にふさわしい内容の文法書を意図してこの本が『メアリーの文法』を改訂してできたことを明言しているが、学内で教本として使われることを念頭に書いたと考えられる。

教本における母親が実はB夫人であった可能性が濃厚になってくる。加えて、ソフィーという妹を通してかろうじて関連性が推定されていたメアリーとウィリーはその後、B夫人が講釈する『言語についての対話教本』において初めて姉弟として同席（ただし、メアリーはエドワードとともにウィリーとソフィーに比べると年上で、あまり口をさしはさまない程度の登場ではある）していることから、この教本から9年さかのぼって発表された1835年の『メアリーの文法』において、メアリーに文法の手ほどきをしていた無名の母親もおそらくはB夫人であったと結論付けて差し支えないと考えられる。また同様にB氏に関しても、彼とB夫人の関係を直接結びつけることができる根拠をマーセット教本のシリーズにおいて見出すことはできないが、ウィリー教本における母親がB夫人であるならば同じく名前を与えられていなかった父親もB氏である可能性が高くなってくる⁹⁾。

もちろん、個々の作品はもともと独立して発表されているため、B夫人を含め、すべての登場人物に対してその名前が他の作品と同一という事実だけで作品同士を完全に結び付けるのは短絡的であるという批判があるかもしれない。だが、年代順に作品を並べてみれば、各々の登場人物たちが完全に恣意的に名付けられたとは決して言い切れない関連性が随所に見られることも事実である。例えば、兄弟姉妹の推定年齢とその幅を取り上げてみよう。子供向けの最初の教本の主人公であるメアリーが文法を母親から学んでいるとき、ソフィーは小さな妹であった。後にソフィーが主要登場人物として母との「家庭学習」に積極的に関わり始めたとき、メアリーは妹ほど頻繁にその場に登場しない。かわりにソフィー自身にもキャロラインという妹ができており、教本の出版年の間があいた分だけ、B一家もまた家族として成長と拡大を続けているのである。緻密な構成とは言えないまでも、マーセット自身が教本シリーズを出版していく過程において念頭においていた複数の登場人物像は、年月を経て一つにまとまり、B夫妻を中心とする家族となっていくと考えるのが妥当であろうと思われる。そして、このマーセットの教本執筆過程において次第に出来上がっていった虚構家族のモデルは言うまでもなく、マーセット自身の生涯において密接に関わっていた家族や親族のうちの数人であった。

次に示す図1と2は、マーセット本人を中心に、ごく親しい親族の関係を示した家系図と、彼女の教本世界におけるB一家とその家族、そして夫妻と師弟関係にあった人物を、教本内から推測できうる限りを抜き出してまとめたものである。

⁹⁾ B氏のマーセット作品における位置づけについては、『キリスト教対話』執筆時のマーセットの伝記的事実に沿った解釈を後に行う。

家庭に入ったB夫人（吉野）

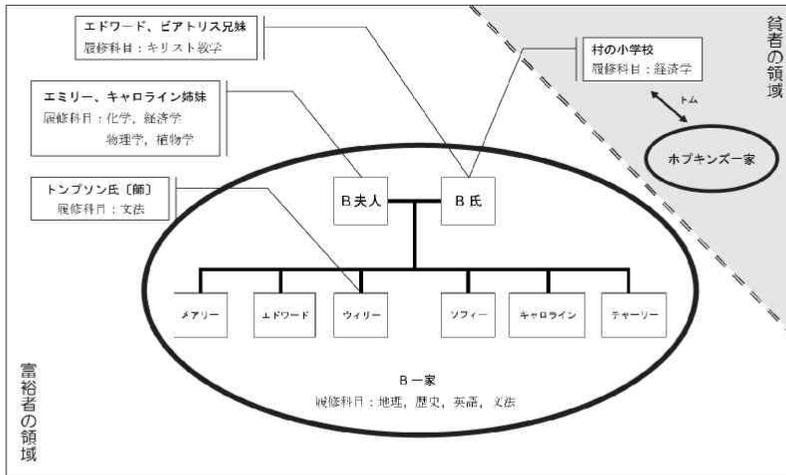


図1 マーセット教本全シリーズにおける登場人物 相関関係

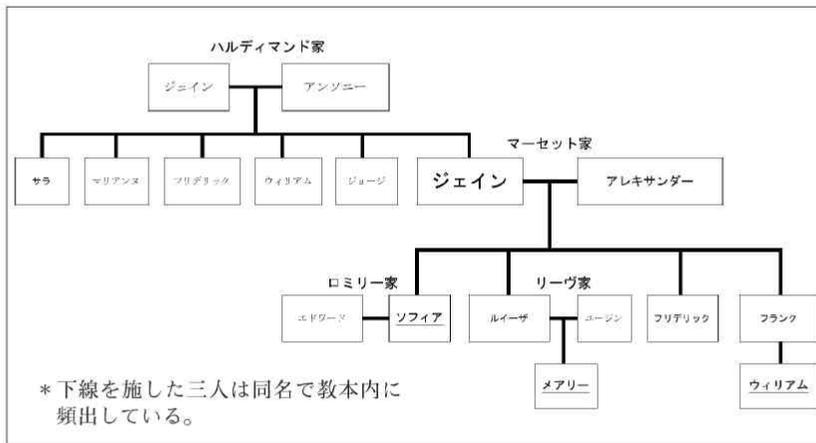


図2 ジェイン・マーセットを中心とする家系図

実在と虚構，この二つの世界における家系図を併置してみると，そのどちらにも共通する名前がいくつかあることに気がつく。まず，マーセットにとって孫娘にあたるメアリー（実在）とB一家の娘メアリー（虚構）である。ポーキングホーンの記したマーセットの伝記によれば，マーセットは，実の娘ルイーザがメアリーを産んですぐに体調を壊し，最終的には死亡したため，自分にとって孫となるメアリーを手元に引き取り，母親代わりとして育てていた時期があったという。そしてこの時期，これまでとはまったく違う新境地として，子供向けの教本を書くことにより，マーセットは娘を失った悲しみを乗り越えようとしたのである。このことから、『メアリーの文法』は，亡娘ルイーザへのオマージュ

であり、孫のメアリーに対し、ルイーザにかわってマーセット自身が再び母親としての役割を果たすことを表明した作品として読むことができるといえるだろう。

メアリーへの教育はまた、マーセットに三度目の家庭内学習監督者としての役割を与えることになった¹⁰⁾。すなわち、この家庭内学習の経験はそのまま、教本内の最初の生徒であったキャロラインやエミリーよりさらに幼い10代未満の子供たちをターゲットにした新たな教本シリーズ執筆へとマーセットを導いたのであった。そしてその際、もう一人の実在モデルになったと考えられるのが、マーセットの一番のお気に入りの孫であったとされるウィリアム・マーセットである。ポーキングホーンによれば、マーセットはウィリアムに対し、彼女の作品『ウィリーの列車の旅』が、6歳当時のウィリアムをモデルに、彼が実際に行った旅行先でのことを書いた本であることを明かしている¹¹⁾。B一家の家庭内学習活動ではもっとも頻繁に登場し、お馴染みのキャラクターとして親しまれることになったウィリーは、著者マーセットにとって、晩年における自身の家庭内における教育貢献の成果を体現したキャラクターだったのである。

また、B氏の存在についてもここで伝記的事実との関連性を指摘するのが妥当であろう。B氏は『富と貧困』で村の小学校の校長先生として登場したときから遡って25年前に、『キリスト教対話』でエドワードとビアトリスの教師役をつとめている。ポーキングホーンによれば、この教本執筆の一年前、マーセットは彼女の文筆活動の良き理解者であり助言者であった夫アレキサンダーに先立たれ、精神的にひどく衝撃を受けていたが、このとき彼女を立ち直らせるきっかけとなったのが、子供たちの教育と彼女自身のキリスト教に対する信仰心であった。そしてこの信仰心から彼女は『キリスト教対話』の執筆を思いつくことになる¹²⁾。『キリスト教対話』はキリスト教における神の存在と、新約聖書の内容の信憑性について、神学に関する文献を参照しながら歴史的に考察し、最終的にはその信憑性を肯定している教本である。扱うテーマが「宗教」という、これまでマーセットが手がけてきた「科学」的な学問分野とは異なる系統に属することもあってか、対話形式によって学習者が知識を深めていくやり方は踏襲しつつも、その対話をリードする教師役に、マーセットはこれまで理性的で科学的知識を奨励し続けてきたB夫人を再登場させることはなかった。かわりに超自然的現象を含めた宗教思想を説明する役目を担ったのは、初め

¹⁰⁾ 一度目は、マーセットが15歳のときに死亡した母親にかわって幼い弟や妹を教育したときで、二度目は、結婚後に4人の子を教育したときであった。マーセットは、孫娘メアリーの養育に関わったことで実に三代にわたって家庭内教育に従事したといえる。

¹¹⁾ Polkinghorn, 126.

¹²⁾ Ibid., 76.

て登場する男性のB氏であり、この唐突な男性キャラクターの起用は、少し前に超自然の領域へと旅立って行った自身の夫アレキサンダーとのつながりを多分に示唆している。

II. 『富と貧困』の内容分析

以上で述べたような、マーセット作品群における時系列的な変遷とその文脈を意識した上で『富と貧困』に向き合ってみれば、経済学に関するマーセットの最後の「教本」とその他の教本との関連性と特異性にあらためて気付かされる。まず関連性としては、『富と貧困』は、『メアリーの文法』以降の作品群としての新対話シリーズの延長線上にあって、子供向けに書かれたものであったという事実である。もっとも、前述の一覧表では、マーセット教本において『富と貧困』が子供向け新教本シリーズの中では登場人物も設定も、タイトルも、その他の作品との差異を際立たせてはいる。とはいえ、新対話シリーズでお馴染みのB一家からB氏を起用することによって、この作品も実はシリーズと緩やかなつながりをもっているといえるのである。

一方でこの作品がもつ特異性とは、言うまでもなく、教本が想定している読者層である。『富と貧困』の序文で、マーセットは、この教本が「富裕層であれ貧困層であれ」、ともかくは「子供たちのため」に書かれたものであるということを明言している(iv)。しかし実際のところ、この教本が最初から富裕層の子供たちを、少なくともその主要な想定読者としていないことは明らかである。仮に富裕層の子供たちをも想定読者としているのであれば、なぜ、とりわけこの教本の中では、経済学が、マーセットの教本シリーズにおいてこれまで順調に積み上げられてきた言語や地学、そして歴史学のレッスンと同様に、B夫人の家庭内学習の一環として位置づけられなかったのか、そこを問いなおす必要が生じてくるだろう。これまでの作品の流れの中で既に家庭に入ってしまったB夫人では、設定として労働者階級の子供と接点をもつことはありえなかった。そしておそらく、この教本執筆の時点で著者マーセットがもっとも意識していたのは、労働者階級の子供たちへの経済学の浸透であっただろう。だからこそ、お馴染みのB夫人ではなく、彼女に限りなく近い男性であるB氏を再度起用し、彼を家庭外の公的教育機関であり、なおかつ小さな子供たちが集う場所としての小学校に校長として配置させ、B一家とは階級の異なる貧困層に経済学を浸透させるお膳立てをする必要があったのである。

ここで『富と貧困』の内容について、その詳細を分析してみよう。基本的な読み書きの知識を習得し、それなりに知識もある選りすぐりの少年数名を相手に繰り広げられるB氏

の経済学講義は、それでもかなりB夫人がキャロラインに施した教育とは段違いに簡略化されており、扱われるテーマやトピックには偏りが見られる。教本がキャロラインのような10代の青少年よりさらに若年層をターゲットにしていることもその原因の一つといえなくもないが、それ以前にまず、講義対象となっている数名の小学生男児たちが労働者階級に属していることで、特にこの層に対して必要であると著者マーセットが判断したトピックを中心に上げているところがこの教本の特徴となっている。表2と3は、前者がマーセット執筆の経済学関連の3作についてその目次を併置させたものであり、後者は『富と貧困』の目次部分で示されている内容の概要を記したものである。

表2 マーセット経済学教本3作品の目次一覧

『経済学対話』(1816)		『ジョン・ホブキンス』(1832)		『富と貧困』(1851)	
章	目次	章	目次	章	目次
1	序	1	富める者と貧しき者—おとぎ話	1	労働
2	続 序	2	賃金—おとぎ話	2	続 労働
3	資産について	3	三人の巨人たち	3	利益
4	続 資産	4	人口に関して—旧世界	4	続 利益
5	分業について	5	移住—新世界	5	資本
6	資本について	6	貧民税—不誠実な友人	6	続 資本
7	続 資本	7	機械—安価な商品と高価な商品	7	機械
8	賃金と人口について	8	外国貿易—結婚衣装	8	価格と生産物
9	続 賃金と人口	9	穀物貿易—パンの価格	9	賃金
10	貧民の状況について			10	続 賃金
11	収入について			11	資本とその使われ方
12	地代による収入について			12	貿易について
13	収穫による収入			13	金銭と銀行
14	資本貸出による収入				
15	価値と価格について				
16	貨幣について				
17	続 貨幣について				
18	商業				
19	外国貿易				
20	続 外国貿易				
21	支出について				

* 網掛け部分は初出をあらわす。

表3 『富と貧困』目次と概要

課	目次	概要
第1課	労働	仕事と賃金—富と貧困の差—労働—労働なくして耕作なし—物乞いと野蠻人は労働しない—労働の結果
第2課	続 労働	貧富の差をなくすためのトムの対処法—富の不均衡は貧者と富裕者双方にとって有益であるという先生の教え—労働を賃金にかえること—Free Bargains—労働の困難—貧者と富裕者が互いを必要としていること—文明人と野蠻人の違い
第3課	利益	貧者の労働で儲けることは不正であるか？—貧者の労働は共同体全体にとって良いこと—帽子の買い物が示していること—貧者の労働で富裕者は儲けすぎているのではないか？—貧者と富裕者は両方で賃金価格を決定している
第4課	続 利益	貧者の労働によって生まれた利益が資本となる—収入—支出とは
第5課	資本	資本とは—様々な種類の富
第6課	続 資本	貧者は資本で生きている—富裕者は収入で生きている—富裕者は自身を苦しめずして貧者のみを苦しめたりすることはない
第7課	機械	高学歴層は頭脳で稼ぎ、発見と発明をする—機械は人間よりうまく安く働くことで手仕事の需要を生み出している—機械がうみだす富
第8課	価格と生産物	価格—市場における価格の声は万国共通の言語を話す—貧者は労働によって生かされる—仕事の過不足はなぜ生じるか
第9課	賃金	低賃金に対するトムの対処法—賃金決定の悪影響—水夫たちへの少ない手当—外国産小麦による救済—政府ができることとできないこと—結論
第10課	続 賃金	チャールズの貧困への対処法—悪い結果—人間の自然な状態は進歩すること—人間と野獣の違い—文明人と野蠻人の違い—価格が食糧配給を規定する—需要と供給—需要と請求の違い
第11課	資本とその使われ方	国の富はどのように増えるのか—農業はどのように国の富を増やすのか—工業はどのように国の富を増やすのか—使用人は間接的に富を生み出す
第12課	貿易について	貿易はどのように国の富を増やすのか—市場、道路、鉄道など—国内貿易—外国貿易
第13課	金銭と銀行	貯蓄銀行—イギリス銀行—紙幣—銀行の利益—鑄造硬貨

3作の目次を比較して判るのは、『富と貧困』の最初の4章分（労働，利益）に充てられたトピックは、前の2作品において章として独立させて扱われるトピックではなく、したがって、この作品のオリジナリティとして位置づけられる。労働者階級に属する児童たちにとって、勤勉なる労働こそが豊かになるための最重要事項であり、また、そこから生じる「利益」は富裕層が独占しているのではなく、共同体全体の利益につながるというマー

セットの見解がここで示されていると言ってよいだろう。

これまでの2作品になかったトピックが加わった反面、削られた内容も存在している。その代表的なものは、救貧法の現状や人口増加に関する当時のイギリス社会で問題になっていた事柄で、これらは『経済学対話』と『ジョン・ホプキンズ』の両方でかなり詳しく論じられていたにもかかわらず⁽³⁾、『富と貧困』においてはこの二点の問題は章のタイトルのみならず、実際の講義内容においてもほとんど扱われていない。人口増加の問題と晩婚奨励がこの教本で取り上げられなかったのは、想定読者の小学生児童に生殖の話題は時期尚早であるという判断に基づいたものかもしれない。また、救貧法に関しては、削除されたことの原因の一つとして『ジョン・ホプキンズ』の発表以降、教本を通して社会問題を提起する役割は後続のマルティノーに譲り、自身はあえて時事的な社会問題に言及しない選択をとった可能性が考えられる。しかし、削除されたテーマはマーセットにとってもはや不必要と考えられていたわけでは決していない。むしろ、この教本においてマーセットは直接的な社会問題⁽⁴⁾に言及せずして、いかに子供たちに自助と勤勉の重要性を刷り込むか、その点に力を注いだと言ってよいだろう。そして、そのためのレトリックとして彼女が選んだのは、子供たちが最初に提示する「富裕者と貧者の二項対立」という固定概念であり、その二項対立を「師(=Master)」であるB氏が講義を通して徐々につき崩していくという、いつものスタイルであった。

『富と貧困』では、自らを「貧者」と定義している6名の子供たちが、持つものと持たざるものが存在することに対して不平等感を持っており、その疑問をB氏に投げかけるところからレッスンはスタートする。そして生徒たちの不満や疑問は毎回、B氏が経済の仕組みを説明することで解消していく。例えば、第1課では、貧困層が物乞いをし、衣食住に事欠く現実に対して生徒のトムが「それは金持ち連中が充分彼らに〔物資を〕与えていないからだ」(2)と言う。その言葉を受けてB氏は、富裕者と貧者は労働を介して結びついているのであり、一方は労働とその対価としての賃金を支払う側、もう一方は、与えられた労働に従事し、賃金を得ているのだ、と、両者の対立を否定し、相互関係を強調している(3)。続く第2課でも冒頭部でトムは、持つ者と持たざる者の格差をなくすためには「富裕者の富の大部分を取り上げ、それを貧者に与えて欠損を補えば、すべてがうまくいく」という提案をする(9)。これに対してB氏は、「富裕者は貧者を雇用することで彼らの

(3) Yoshino (2007) および Yoshino (2008) でマーセットの問題意識について言及している。

(4) ここでは、救貧法という国の制度に依存し、援助目当てに働くことをやめてしまうという悪循環の問題を指す。

生活を保障し、また貧者は富裕者のために働くから、双方ともに繁栄する」のであり、「この両階級における契約は市場の売り手と買い手の間がそうであるように、自由で開放的なものだ」と説明する(10-11)。こうして「労働」という概念で富裕者と貧者の相互依存的関係を説き、いったんは生徒たちの不満もおさまったかのように見えるのだが、早速次の課の冒頭では、「利益」に関する講義の導入として「労働者は〔自身が生産した生産物と〕等価の賃金を得ているわけではない」というB氏の説明を聞いて子供たちが驚き、「貧者に対して何と不正なことか」と口々に不満をこぼしている(15)。するとB氏は今度は、「利益」と「リスク」について農園経営者と小作人之间にある穀物生産の際に生じる天候やその他のリスクと賃金のやり取りや、帽子屋と顧客の間に発生する商品売買と在庫リスクの問題について言及し、子供たちが最初に感じた不満を取り除く(16-18)。

このように、6人の子供たちの中でもとりわけ富裕者に対して敵視する傾向が顕著なのはトムと呼ばれる少年で、彼は教本の前半部分においてはB氏の教授内容に反発する役割を担っている。その短絡的で時として扇動的な発言が思い起こさせるのは、『ジョン・ホプキンス』におけるジョンの被害者意識であり、また、彼の利発な息子で村の小学校では級長もしていた同名トムの存在である。『富と貧困』におけるトムの披露するエピソードによると彼の家族は「8人もの」子供がいたが、そのうち数名を凶作の年にチフスでなくした(47)。『ジョン・ホプキンス』ではもともと16名の子供がいたところ、はしかや天然痘で9名に減ったことになっているため、状況的に両作品における「トム」が同一人物という設定である可能性は薄いのであるが、少なくとも似通った境遇の「トム」を介して、一連のマーセット教本シリーズにおける『ジョン・ホプキンス』と『富と貧困』の関連性を指摘することもできよう⁽⁵⁾。しかし、トムの富裕者に対する敵対心は、B氏による教えと生徒間での話し合いを経た後、教本の前半部分の最後、すなわち第6課の終わりの部分でついには落ち着き、B氏はそれを指摘して次のように言う。

トム、先生は嬉しいよ。君はようやく、金持ちと貧乏人の利害は同一のものであるという考え方ができるようになったんだね。

B氏のこの発言は、さらに続くジョンのセリフでその信憑性をさらに高めていく。

(5) 先の図1における右上の「貧者の領域」に配置されたホプキンス家と小学校の間で行き来するトムはその関連性を示している。

トムはこれ以外の考え方なんてできないです。だって、先生は本当にわかりやすく教えてくださったのですから。(32)

マーセットはこの教本においても再び、読者が抱くであろうと予想される疑問点や反発心を前もって提示させながら、知識教授の過程において対話内でそれを封じ込めることで作者の望む結論に無理なく導いていこうとしている。しかもこの場合、生徒は複数人存在するため、トムの学習効果を読者に印象付けるのに、指導を施した教師の立場からだけでなく、トムと同じ生徒の立場からもコメントをはさみこむことができる。こうして、体裁としては、貧者の反発→知的権威の説得→貧者の鎮静→知的権威の優位という形が教本内で出来上がっていく。

加えて、この教本では富裕者と貧者という単純な二項対立を軸としながらも、貧者をさらに二分化し、勤勉な者とそうでない者を対立させている。そして同じ労働者階級に属するも勤勉な労働者の部類に属する子供たちに対し、B氏は怠け者の存在が社会悪であることを繰り返し説いていく。先にも述べたように、『富と貧困』では、『経済学対話』や『ジョン・ホプキンス』で扱われていた救貧法や救貧院の現状について直接的言及はないが、ここでのB氏の説明はそれを示唆する内容となっている。例えば、第1課で労働の重要性を説くにあたり、B氏は富裕者と対極をなす貧者の中でも労働者が物乞いや野蛮人とは区別されるべきであることを強調している。また、第10課においては、たえず進歩を続けるのが「文明人」であり、そうでないものは「野蛮人」であるときき下ろし、勤勉であることを繰り返し奨励するのである。そしてこの「教育」の成果は、生徒たちの中でも一番反動的であったトムが彼の家族の陥った過去の苦境を振り返りつつ話す独白の場面にその有効性が示されることになる。

お屋敷に住むS夫人のお恵みがなかったら、僕たちはみんな死んでいたかもしれないかったんだ。彼女は僕たちのために医者と呼んでくれて、医療品やその他、必要なものを全部届けてくれた。でも僕たちは乞食⁶⁶ではなかった。僕たちが他人の作ったパンを食べたのは、病気だったからだし、仕事をしたくても人手はまったく足りていなかったんだ。父さんも母さんも僕たちの世話で仕事どころではなかった。それに、先

⁶⁶ ここでの「乞食」は原文では“paupers”で、働かずに国や富裕者からの援助を当てにしてばかりいる怠惰な貧民を指している。トムは自分がS夫人のお世話になったが、その援助を最初から当てにしていたわけではないということをここで強調している。

生がおっしゃっているように、[凶作で] 仕事がほとんどなかったんだ。だから、お金持ちのお恵みがなかったら、死ぬか、救貧院に行くかの選択しかなかっただろうよ。

(47 下線筆者)

富裕者（＝与える者）と貧困者（＝得る者）という二項対立はそのままに、トムはB氏の教えを踏襲して、一時的に「得る」ことに甘んじてはいるものの、それはやむを得ない事情のためであって決してこの手段を常用しないという誇りと決意を見せている。しかし皮肉なことに、彼が「救貧院に行く」ことを免れ、その自尊心を保つことができた背景には、あれほどまでに敵視していた富裕者による慈善行為が欠かせなかったのだ。トムのこの発言は、教本の読者に対して二つの具体的な効果を意図していたと考えられる。一つは、労働者階級の内部における勤勉な人間と怠惰な人間の分離。そしてもう一つは、富を有しているだけではなく、その富をもって（ときとして反抗的な）労働者の懐柔をも可能であると示すことに由来する、富裕者の貧者に対する絶対的優位性である。

『富と貧困』は教本というよりはむしろ、貧困層の富裕層に対する羨望と嫉妬に起因する反発と敵意を食い止めるべく書かれたプロパガンダ的読み物として位置づけられるだろう。ヘンダーソンはかつてマーセットの『経済学対話』に関して「彼女の著した教本は『大衆化』というより『真摯な教育』という視点から見るのがより適切であろう」とその内容の純粋な学術的レベルを高く評価した(44)。しかし、マーセットの『ジョン・ホプキンス』と『富と貧困』を読む限りにおいて、「経済学」をテーマに教本を書くことは、「経済」が人々の金銭的豊かさに身近で切実な問題であるがゆえに、その想定読者が誰であるかということも含めて政治的にバイアスがかかることを余儀なくされるものであるという可能性をにおわせている。事実、『ジョン・ホプキンス』が労働者階級の人々を対象にしたわかりやすい経済学を広めることを意図した結果、マーセットは新救貧法をめぐる世論にまきこまれてしまった。その後、児童教育をテーマに定め、教本を執筆するも政治的な時事問題から意識的に遠ざかっていたはずの彼女が、その延長線上で再び経済学を取り上げたとき、結果的には労働者階級の子供たちを「教育」という権威の手段でもって富裕層の立場から都合よく思想的に懐柔する内容の教本を仕上げることになっていったのであった。

参 考 文 献

- [1] Dimand, Robert W., Mary Ann Dimand and Evelyn L. Forget. *A Biographical Dictionary of Women Economists*. Northampton: Edward Elgar Publishing, Inc., 2000.
- [2] Henderson, Willie. *Economics as Literature*. London: Routledge, 1995.
- [3] Marcet, Jane Haldimand. *Conversations for Children: on Land and Water*. London, 1838.
- [4] —. *Conversations on Chemistry in Which the Elements of That Science are Familiarly Explained and Illustrated by Experiments*. London, 1805. (1824)
- [5] —. *Conversations on Language for Children*. London, 1844.
- [6] —. *Conversations on Natural Philosophy in Which the Elements of That Science are Familiarly Explained and Adapted to the Comprehension of Young Pupils*. London, 1819.
- [7] —. *Conversations on Political Economy in Which the Elements of That Science are Familiarly Explained*. London, 1816.
- [8] —. *Conversations on the Evidences of Christianity*. London, 1826.
- [9] —. *Conversations on the History of England* (Part 1 & 2). London, 1842, 1844.
- [10] —. *Conversations on Vegetable Physiology*. London, 1829.
- [11] —. *John Hopkins's Notions of Political Economy*. Mary's Grammar. London, 1833.
- [12] —. *Lessons on Animals, Vegetables and Minerals*. London, 1843. 1844.
- [13] —. *Mary's Grammar: Interspersed with Stories and Intended for the Use of Children*. London, 1892.
- [14] —. *Rich and Poor*. London, 1851.
- [15] —. *Stories for Young Children*. London, 1831.
- [16] —. *Willy's Grammar*. London, 1845.
- [17] —. *Willy's Holidays or: Conversations on Different Kinds of Governments*. London, 1836.
- [18] —. *Willy's Travels on the Railroad*. London, 1847.
- [19] Polkinghorn, Bette. *Jane Marcet: An Uncommon Woman*. Aldermaston: Forestwood Publications, 1993.
- [20] Yoshino, Narumi. "Gender, Sentiment and Science: the Rhetoric of Jane Marcet's *Conversations on Political Economy*." *Ikoma Journal of Economics*, Vol. 4, No. 3, pp. 121-138, 2007. (In Japanese)
- [21] —. "Jane Marcet's *John Hopkins's Notions of Political Economy* (1833): Its Narrativity and Ideology." *Ikoma Journal of Economics*, Vol. 5, No. 3, pp. 137-156, 2008. (In Japanese)